



知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

末崎 孝幸氏

1945年生まれ。1968年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員(調査本部長)を務める。2004年に退職。Facebook上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



ゴルディアスの結び目(を解く)

古代アナトリア(今のトルコの中央部辺り)の王ゴルディアスが、自分の牛車を神に捧げ、樹皮でできた丈夫な紐で牛車の轆(ながえ)をしっかりと柱に結びつけ、「この結び目を解くことができた者こそアジアの王になる」と予言した。その後、結び目を解こうと多くの男たちが挑んだが、結び目は決して解けることがなかった。

数百年後、マケドニア王アレキサンダーが現れた。彼も結び目に挑んだが、なかなか解くことができなかった。するとアレキサンダーは剣を持ち出し、結び目を一刀両断に断ち切ってしまった。そしてアレキサンダーは予言通り、アジアの王となった。



この故事から、手に負えない難問を誰も思いつかないような発想で解決してしまうことを「ゴルディアスの結び目を解く」というようになったのである。「ゴルディオンの結び目」ともいう

モラルハザード



長期投資仲間通信「インベストライフ」

最近「ハザードマップ」など、ハザード(hazard)という言葉に接する機会が増えているが、「危険」「潜在的に危険の要因になるもの」という意味だ。

一方、「モラルハザード」とは本来、保険業界を中心に用いられてきた専門用語で、規律の喪失、倫理観の欠如した状態をいう。すなわち、危険回避のための仕組みを整備することにより、逆に人々の注意が散漫になり、事故の発生確率が高まって規律が失われることを指す。

つまり、保険への加入で保障制度が整備され、リスクに対する意識が希薄になって、かえって事故や危険の発生率が高まることをいうのであり、単なる不道德的な行為や倫理不足による行為を指すわけではない。

例えば、自動車保険の場合、保険に加入したことで安心感を覚え、かえって危険な運転をしたり、医療保険の場合であれば、被保険者は自己負担額が軽くなるため些細な病気やケガで医療を受けたり、医師が診療報酬を増加させるため、患者に必要以上の薬を処方するといった行為などが挙げられる。

席卷&合従連衡

中国の戦国時代後期、縦横家(しょうおうか、主に弁舌法を研究していた思想家)の一人であった張儀は、楚の懐王に秦の強さに対して連衡策を薦めた。「秦の主君は賢明で、兵力は多く、軍備も万全です。堅固な地もまるで席(むしろ)を巻き取るように簡単に攻め取ってしまいます…」

張儀はこれほど強い秦には逆らわない方がいいと言って、楚王に連衡策(強大な秦と各国が同盟を結ぶ策)を説得したのである。この張儀の口述から「席卷」という言葉が生まれた。席は「むしろ」のこと。「席卷」は他国の領土を簡単に攻め取ることを意味していたが、今では勢いのいい様を意味する言葉になっている。

燕、齊、趙、魏、韓、楚の6か国が個々に秦と同盟するのが張儀の「連衡策」、6か国が同盟して秦に対抗するのが蘇秦の提唱した「合従策」、ここから「合従連衡」という言葉が生まれたのである。

1円硬貨に印字されている木の名は？

硬貨にはそれぞれ植物が印字されている。10円は常緑広葉樹林、50円は菊、100円は桜、500円は桐(裏面には竹と橘)である。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

では、1円硬貨に印字されているのは何の木だろうか。実は1円硬貨には「創作の木」が印字されている。昭和29年に1円硬貨のデザインを募集したところ、「若木」という名の図案があり、それが採用されたのである(昭和30年に発行)。当時の日本は復興途上にあり、1円硬貨のデザインに「すくすくと伸びる若木に国の経済成長を託す」意味合いがあったのかもしれない。



惻隱の情

平成の時代に入り、死語になりつつある言葉の一つがこの「惻隱の情」である。元々は孟子の言葉「惻隱の心は仁の端なり」からきているものだが、「他人の悲しみや不幸を、自分のこととして受け止める」という意味だ。換言すれば、相手の立場に立って、ものごとを感じとるということである。2011年の東日本大震災の時には「絆」という言葉がよく聞かれたが、「惻隱の情」は「絆」に通底する言葉なのかもしれない。

また、「惻隱の情」は戦後失われた「武士道精神」の中核をなすものでもあり、私が一番復権してほしいと思っている言葉である。

千秋楽

玄宗皇帝の前半の治世は「開元の治」と呼ばれ、太宗(2代皇帝、李世民)の「貞観の治」と並び称される唐の隆盛期であった。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

「開元の治」を実現した玄宗を称えて、玄宗の誕生日を「千秋節」として国を挙げて祝うようになった(千秋は千年の意で長寿を表す)。そのときに演奏された音楽が「千秋楽(せんしゅうがく)」である。

これが日本に伝えられて、法会の最後に演奏されるようになった。こうして物事の最後の意味で「千秋楽(せんしゅうらく)」という言葉が使われるようになった。現在では相撲や歌舞伎といった興行の最終日として使われている。